



家のお嬢さん

「お母さん、犬がおるん知ってる？」

7年ほど前のまだ寒い時季のこと。彼女は自宅横の田んぼに現れた。

まだ生後2、3カ月くらい
のメス犬で、
器量良しとは
いえない容姿。
人におびえ、
近づくこと逃げ
ていた。

世話好きの父が餌をやり始めた。「居つかれたらどないするん」「ほのうち居らんよくなるわ」。そんな会話を幾度となく繰り返されるなか、暖かくなる頃には首輪を付け、庭でドッグフードを手渡しで食べる彼女の姿があった。

寝マットを3枚重ねて優雅に寝そべり、食事をたつぷりととり、時にはなじみのない来客をほえて教える、私から見ればうらやましい日々を過ごしている。また、家族には、彼女がどう過ごしていたかや、どんな寝方をしていたかといったような話題を提供するなど、今やかけがえのない家族の一員となっていて、父は彼女のことを「家のお嬢さん」と呼んでいる。



上中町 里廣 理恵さん

そんな彼女も人でいう40代後半の年齢となる。今後体調や食事の面で一層の配慮が必要となるだろう。そのようなことを思いつつ、明日からも今日と変わらぬ日常が繰り返されることを願い、いつものように「モフ、おはよう。行ってくるね」とあいさつをして出勤しよう。

次は、桑野町の西崎憲志さんをお願いします。

市民文芸

短歌

阿南市文化祭短歌大会選

朝なさな今日も元気に頑張るぞ鏡の中の自分に誓う
小野スミ子

引き揚げに触れず川面のスケートを遙けき瞳で母は語りぬ
森岡 圭子

草や木の歓喜の声する待ちに待つ雨の降り来て土に浸むれば
山西 成彬

広まりぬ「ここだけの話」風に乗り鳳仙花は種子はじきとばせり
吉形 和恵

せせらぎの音遠のきて峡の闇川面静かに河鹿は鳴けり
佐々木夫美

畦に咲く向日葵三本風の立つ稲穂の波へ頭を垂れる
黒部 君代

「花は咲く」口ずさみても寂しさにつきまといわれし初盆の夜
谷一 民子

俳句

阿南市俳句連合会選

桜咲く隣に一つランドセル
荒谷 隆文

復興は仮設の窓の朧月

見送られ振り返りつつ卒業す

豌豆の花ふくらめど春遠し

硝子拭く春の光を通しつつ

独り居や日毎に読書春炬燵

ふり向けば懐しき人梅見橋

春時雨船頭唄う安来節

花開く人影見えぬ被災地に

青空を映す川面に風光る

横手 久典

田中 千香

有賀 義子

平野 貞子

田中 織女

阿部 和恵

佐々木八千代

近藤ヤス子

森 泰子

川柳

阿南川柳会 高木旬笑選

行けんわなあ膝に聞いている遍路旅

失礼なタマが顔見て欠伸する

枯れ色に少し紅さすまだ八十路

本尊は家に在ります山の神

本当はギュッとハグして欲しかった

武田 敏子

鈴木レイ子

林 満子

酒本 敏博

佐野 智子